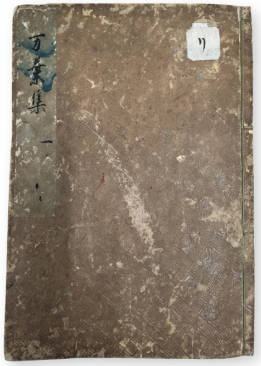
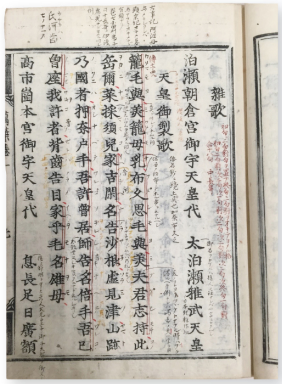
古活字版『萬葉集』（活字無訓本）





函架番号 I-35。和文の古典文学作品を初めて刊行した「古活字版」の刊本であり、萬葉集中、最古の刊本である。序跋・奥書・刊記等は記されていないが、徳川家康による伏見版の木活字を使用した「慶長古活字本」と考えられる。当該本は、漢字本文に訓が付せられていない「活字無訓本」と称されるものであるが、無訓本としては、非常に稀な 20 巻 20 冊本である。縦 28.2cm × 横 19.6cm。表紙は、朽葉色雷文襷雨龍型押。外題「万葉集　（巻数）」（左肩題簽）、匡郭は、四周双辺無界。1 面 8 行 18 字。なお、当該本には、墨・朱・黄で、片仮名の傍訓や補注、対句を示す二重朱引等の書入がなされている。書写奥書・識語等も全くなく、どのような経緯で書入がなされたかは現段階では不明であるが、訓や補注は、橘千蔭の「萬葉集略解」（寛政 8 年〔1796〕成立）に文言が一致する箇所が多い。

また、「活字無訓本」は、巻 4 の 520 番歌以降 273 首を欠いており、巻 3 の 377 番歌以降 107 首が重出し、巻 4 の後半部とされている。この形態は、冷泉家本系統の「細井本」と同形態であるが、当該本は、巻 4 の 17 丁（516 番歌）までは、匡郭のある上記紙面にて記され、18 丁（517 番歌）以降は、無辺無界の紙に、8 行 18 字で歌本文、ならびに訓・補注を新たに付け加えている。また、巻 3 の巻末には、旅人・家持・不比等の伝が付せられているが、これは他の「活字無訓本」と同様である。

この「活字無訓本」を底本とし、寂印・成俊本系の写本によって校合を加えた「活字附訓本」（片仮名の訓を各行右傍に別行植字）も「古活字版」にて刊行され、これらをもとに、萬葉集研究は大幅に推進されることとなるのである。なお、本学所蔵の当該本を「活字附訓本」と記すものもあるが、これは誤りである。

〔参考文献〕『校本萬葉集 一』（岩波書店 1931）、川瀬一馬『増補古活字版之研究』（日本古書籍商協会 1967）、鈴木淳「万葉集出版小史」『江戸文学』第 15 号（ぺりかん社 1996）、小川靖彦編『萬葉写本学入門』（笠間書院 2016）

（文学部日本語日本文学科 准教授　東城敏毅）